



序

甲之百童居士。自効力莫如蕉翁  
之風。善誹諧之體。四方騷雅之  
士。游于甲者。皆主居士之家。  
應酬答和。易賓而不易主。  
詼嘲笑謔。靡非如鋸木屑云。

辛未歲以病而逝矣。時年  
十七。其子百二又奉先人之  
風吟哦不廢口。今茲大祥之  
忌。自以為抬僧徒。從水陸  
齋而追其福。不如請執友  
同好士吟咏各首。而奠以

牌前以怡神意也。迺與一叟  
老人相謀為此舉焉。拜成  
乞序于余。歎曰。余今觀百  
二繼其先人之志而能成其  
事。則誹諧之技雖小乎。其  
志之厚。吾奚奚小視以哉。於

是乎序。

文化十年癸酉之夏

江戸鵬齋老人興書

凡例

一 父命終の事四五年前にほりて何れもその  
 ころして互好もとの終入とて休撃し、いは  
 ちのしと出れぬ小換しきくもわぬ、  
 たゞし形のうしれるものをやり出でのす  
 一 古人を古人とまゝとせぬ、  
 あつめ、  
 一 集中を文をあるを、  
 送し有るふい、  
 て全す、

ねらるる法君こそ建をいひし終へ  
一さくふりの水をさしぬれしははれ好士  
うらまふおのりしなれはるるさし  
一考辨老為前後世其美かハ一系中の  
まろし度ふ比しそまのまゝのものなり

反故搜

甲斐

流上齋百二編

井：橋一作校

四時

入あはれ春柳のさきさし小ゆく人う

百童

法華經全終五巻しの

書寫終りし

ちらはあまきまひしの夜好学の露  
縮あまきりあふふ本てみあまわ  
腸とある字起学の小隅うま

出づるより此作善しと

うのいふよりうのいふ

むし後を用て

瞿粟のひとくふまのまはれんしと乃

百童

う月十日 暮あつきのさき

百二

御幸海ふ木の窓めゆらん

如柳

うこらあつらんきものちつする

百兒

氣芒いりうきん秋の糸色せう

如童

うさふん秋のこころをよめ

成高

陣ねおてとをを細らう

遊馬

五ふ孫いそく半治との特

登高

あー吹奏木綿手探る小腕小

淇青

えきりう居の室れしんめ

為風

きんもとそちつとあな亀の甲

祐之

帆ふぬるまてのうねはさうり

喜樂

明るが月ふらさし山枚子

一峨

よむしとそらぬ存探る来り

道尾

懐既れまほふぬまきくる静ら岡

真清の

くつりしをむとぬらした下法小

和童

花の木枝咲て見きくと戦く境

一作

蚕まきらんううはれを益くら

宜樂

猿の子れ病うとれくるるゆ小

無端

い勢のまれ字めゆ立と若ぬし

艸美

未をや穴乃中とる佛連

石敲

くつらゆと変る謎の解やう

子雄

おとまき寸大う素湯の涌時分

椿齡

死よとまてふおの心そりし

一磨

多る唇うらふをやうしき毎下風

如雲

馬杉しむしこのうのこの晨明

巴岡

無造作奈さくしけの露時雨

栴枝

芋河巾坊うらまのひらり

松荷

掌少澄路をよまきるさくら浪

相山

志まきく用紙小紙入書

李道

石臼の目もるをりしのたどる床  
襟ふひんまく柳川乃緒  
ち祢馬のつりそさ往咄出  
大ききつれゆりしきり  
うろそ又文化九年の花世艱  
あそゆきりしめくふれ解

煮柳  
椛里  
林千  
煮朴  
松保  
梅舎

大祥の忌より親しきあまや

はらひて淫文類二十八句を分ち

たのしむをほろりて靈魂を

あそぶ心むねをみりするたて

ほろれとこふ志をきりあそぶ

らふ略す



暑天小あなを~~て~~て昔書を

さらばんといひし 識のうしやを  
はきあるる

かきまわるる

ころら 鮭乃腹ふまの守まのまき

成美

埋火を鼻て尋ゆひわうれ

衰丁

所鴨の汚る梅の月如糸

老阿

燦れ月や浅草うけそ 燈の杖

一瓢

赤のそと見えてさつもと蓮の盆

車西

露塔や 燈ぬ 薪も人よを

理峨

ゆきあれはをさけはやうもの掌

心非

船納涼 我も 見くらそ 人方ぬ

凡魯

大為も木縁のそと みる 笑ふ家

得布

松のきをみし 夜のそと ぬ

諫圃

あさこの本の三十日 朔日と 咲ふら

久臧

東もむの 葉の 糸子 ほるる ぬ

九井

花桐ふひの木 何らの 匂ひり 形

青李

青柳や 何ふ 小橋の 人たり ぬ

峯峩

六十と四つ見えさらは海跡魚け  
美の夜小木のまき月のもつと風  
涼しとふはくしつむや祝ひ  
踏んたてまきのあまき妻の跡  
ま〜しとや櫛つす消る膝れう  
菜のまきやあまきしの細子  
松影の月小羽華簾すくま月を乳  
虫れ夜の不うくまき小鳴瓶

道彦

護物

三化

省盧

季道

奔貨

松丈

太民

あまきのまきとまきとる能きまき  
ま〜しとまきれ下小曲まき禁山まき  
櫛まきやまきまきまき〜ハ西大寺  
杉苗能根よ入めらり三日の月  
炭竈の櫛焚煙をばおし〜まき

閑哉

一溪

まき守

一秋

應々

送一茶帰旧里

碓多てま〜しとまきよ杖ハ煙くま  
昔まきのうらハ皆小まき

一幾

一茶

子しあむわらひま  
 りとあはれにまを  
 りとあはれにまを  
 せしむるはまに  
 せしむるはまに  
 せしむるはまに  
 せしむるはまに

してあはれにまを  
 りとあはれにまを  
 せしむるはまに  
 せしむるはまに  
 せしむるはまに  
 せしむるはまに

柳 其堂  
 其堂  
 其堂

裏へのは〜と炭火小袖こそ守

對竹

を川波ゆき入るあさわて尾花を

其堂

喜れ日や庭子も暮る櫛椰子

白芥

志らぬ人のこころも花ふ見ゆらぶ

五俊

我宿を常 蕙方きり松の風

元朝

風ハ何まを吹てゆ〜る鶴頭系

柏舟

白踏てあやめさ〜しりわ系をくれ

竹馬

須磨懐古

汐の圃乃何とすみまけ美を咲

芝山

友川の波を何まをゆ〜る

万布

古寺へ引込ま〜る尾〜れ〜る

曇潮

暑き日和人の出這入多ねの窓

可丸

花垣の庄へ戸もわぬ祢は人の日  
茶見ころろ市色を写るる女世の  
まふれ月見て戸をくやくとす

ノ且  
午心  
完来

財敷則民豊

山さくら結め志のまわちをのらちる  
月さきは現れ口も涼しひれ  
美しき人のそと初一と書  
待花の夜ころろ小きる下紋に

梅壽  
詠帰  
周化  
仙骨

は奈盛大佛と下もはらんあま  
阿さうたの面もをさる麻足は  
我の肩をとりくをるれは春の月  
霧夢つや大車へ這入朝さうれ  
傘や横小——くもく海子さ  
鳴き子多狭のまをれとるを  
ゆきわれ指ふのほる暑とこれ  
萱もきい志くまよぬれてまの月

司風  
元風  
未蘇  
五風  
徐柈  
兔一  
白也  
春樹

少年

日

よる泡のきゆと柳の合欵の花  
 夢みる夜を長くと思ふは  
 多く寝て起て見ふは  
 業嘆き至る唐此正月を  
 青柳を潜わたりて角力取  
 杖立やしのきある後無き  
 虫と小鳴きまをりし  
 居風呂に籠りけり秋の言

一阿  
 鬼洞  
 西字  
 葛流  
 昌安起  
 胤伯  
 一豹  
 恭里



やり里を何とぞとれ神を  
 秋の言をなかに鬼の来り  
 是れを小引をりし

好古  
 橋水  
 宇橋

草小木おとめは見て秋の月

寒松

雞も鳩も日永しきまれば峰

守静

矢皆お横たふ大うの霧も

明良

聴のせりの耳はまき通す月の

延年

無花果れあらふ名のを言れば

芦圓

言成や物の子見ゆる塔の内

其道

紅葉見れうゝ腕際をうらへ

一葉

有仙や洗ひ髪りの新と守

一牛

松樹とさうりお持て秋の月

醜我女

お橋もひらき小菊しきぬこが

保葉

持まや秋をこらへて汝の春

青亀

春吟や川輪の向る岸言し

玉匣

蟬の聲うの月しきふらうら

一鷹

湖のしらさしやほるれ山

道也

春風やまゝ小来不居る安泉寺

瓢傘

うらなれはるるをんを唐の石

直也

十重子小糸のほく梅の蒼の糸  
 うき草のちたれよつこや子れ家  
 まつしとまじ四月乃釋迦も出てぬま  
 暮のころ柏さつらよほれこすみ  
 去月れ二十日にまゆぬ鶴歌  
 塩引のぬらつと年もくれさわ  
 まれ風歌賣も岸をいつてよ

巢兆  
 万外  
 彩羽  
 起石  
 至鳳  
 四賞  
 風谷

廻文 二句

日を飾の永きすの丸し 蛇  
 狸布と果のまきさうしをいふあ

故園  
 素玩

天王守札といふ歌をゆて

つしや蠅の這ひらぬ ぼろろく  
 一哉

雅

月花の揚子よのこや 白れ音  
 峯巖

別戀

似るまをさうし 今ふてる笑  
 作者引ん



三つにまじりし  
さかづき酒の川  
あまのうらに帰る  
敵あはしむる  
さかづきの酒とあはし  
いもあはれぬうら世布  
あまのうらに帰る

あまのうらに帰る  
いもあはれぬうら世布  
あまのうらに帰る  
P 海か  
三つにまじりし  
あまのうらに帰る  
いもあはれぬうら世布  
あまのうらに帰る

昔よりをうはして涼し竹階子

雙鳥

やてりし道さうらも然るるし

星布

春鳥のあしむる茶骨が

園村

足取れ泡うらるるし世系系

燕市

浴衣めす大五人や牛村の

有圭

洲のさねのふをええて立織の

斗月

山里や月影れ松もささの妻

任只

夜中梅香の限りを乱さる

圭夢

あき顔ふ寝しさほくむ戸口うす

赤鯨女

つひ乾く庭ぬき桶やうき板

周也

醫者との市傘やうしこれふ

東子

標をれ羽音追まゐる志なき世

周和

芳れ移や二十九日け月の影

東鶴

笑しけ夜のそしつえゆるや担穀垣

麻生

寝しきをえふまゐる花の菴うら

五渡

踊るおのほらうらや影の残雪板

大兆

日此等々云々え春山の家

路多女

梅咲と毎日天赦よろつるし

喜樂

十月のやわつにはちりもみ田川

梅夫

危ら路ををりしるまのそぢやのそ

えま

朝しの多葉ふわつるころ終るま

不二

春をくし木も樹仲間よ五月の

黍旦

山系益や三日月る計るの解

宝水

穴蟹の朽葉引く心小もふら

有郷

海をるをきるるをきよ寺の此石

和調

うら町や笛もきはくもぢやう焚

古言

あまらや扱子はきくる山の馬

呂律

抱く林や後る樹をのころけ継

也好

日を西へ飛くきてとりみうきる

道布

山裏や益乃ころきみよ語る傳

きく伝

番序よむらきれたまもとの畠

冢緝

正月をひまふるる——悪太郎

碩布

ある人の杉もものふ春の風

一哉

か葉はふみよ二日酔い

成美

帰るや頼む淋しき四十雀

哉

壘の虎さしをほし後の舟や

美

法螺を吹舟の北より南か

哉

魚乃辛も二枚お下

露

美

夷等よ歌をとくさる秋の巻

哉

松の〜傘をさく入佛

美

火籠たなは少家の新結結ひ毎

哉

百合り〜けとも男ぬ〜ん

美

梓神子夢砂と夜の〜ん

哉

朝乾形〜四五日の空

美

雀あふもこの遠く舟の栗栖野小

哉

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

美

七

つゝ程のつゞ年よるの聲  
記の物 吹ほおき波のほり、餅  
何のまぶらの花なきまのま  
待存傍しよとた 百 姓  
酒のまの聲お祓くまをほり  
席兒崎 曇よりのた白雲  
那くまのし親の手紙を徳おけ  
夢のりし後子消る 埋 火

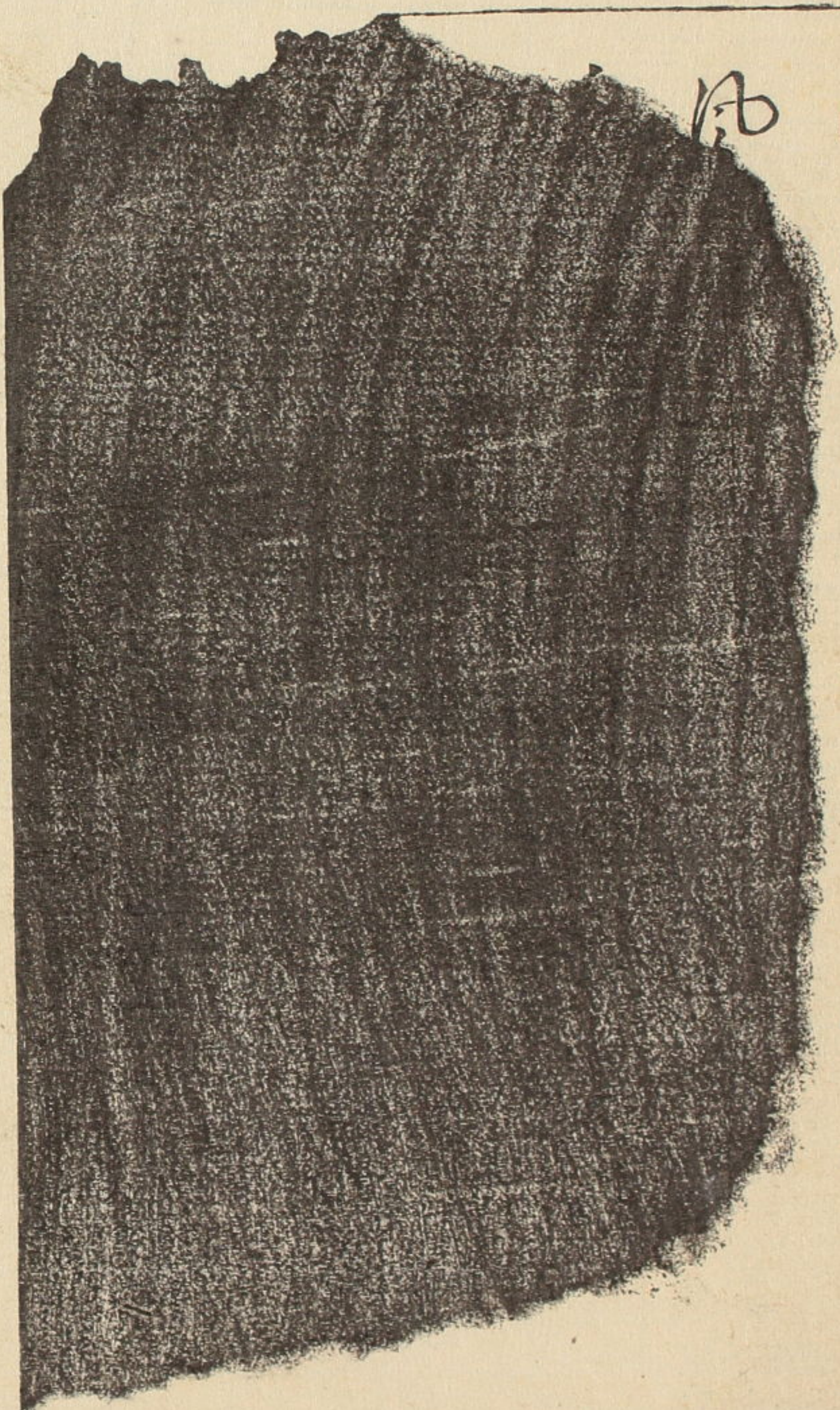
哉 美 哉 全 美 哉 美 哉

衣くの宿をと葉賣お現うれ  
幕の 湯泉の口を觸て来るし  
物鼻巾の癖好るゆき鼻月立  
河童よりのた様を信し美  
馬舌と云らるる海に依右の石  
思おゆしとる美ふ 氣 遠  
十のたのハ素もくしと明つる  
後子や川る 秋の勢の勢

哉 美 哉 美 哉 美

門人少神を引る詠拾

風



美 美 美 美 美

布穀虫の赤くまを宿るらん

澧水

納豆や五三此相入小産をこ

葛三

十月の夜もさふあるさくらん

叙来

中しよほくらぬお押し果作ふ

玉珂

胡や祝ひをらせり加る籠れもの

三笠

多学の思ええても言し山の上

方解

冬はるや野ふひつて空一軒家

雉啄

律の戸をさし小奏とよめわらわ

洞々

十九

馬小鞍くらゐるをうゝくおぬる月

他何

米のきれぬも七月あふふゝ

雀子

やうきのはるる 谷宮よききめ

歳月

新玉よいらをうけらる木芽の乳

竹旌女

春のおや風の急よいつてくま

鷺白

置る物の根のいんえまぐくや推る下

鹿太

盆るやるをいんえまぐくや推る下

月鴻

雪を大事うしやのやうられ敷

粟丈

旅まれをいんえまぐくや推る下

和角

院果てまめをいんえまぐくや推る下

石海

しんえまぐくや推る下

喜年

雀まて流るやうられ敷

由都留

山より流る櫓を流るやうられ敷

年眉

駒急の流るやうられ敷

竹里

山茶急の三日月をうゝる老うら

國丸

ほのぼのと静あてまるふらふら

幽嘯

柳の春の風  
ささやかぬ花の影  
かよふ心  
あはれ

むら山ふは良れ 續々と来とれぬ

眉山

病後

急やつと生こころの秋の音

一茶

けしの思も人の訪ねて我々暮り

素磔

智つこれ紙方さんやらの時

若人

三日月も酔つて来さうさうつ山

雀雨

旅人の心外よめてんぬる是

武日

餅屋のこぼれはさうや襟の影

如毛

何よりをみれ小告ると秋のくれ

雲帯



南よりよき里 見ゆる春の山  
や戸れ賣りあよりと書送し

元雨  
席杖

小言ききはけるこ秋の逢  
菴の雪一財をわ人も来ん  
きのよしつ候もあらん梅茶

士朗  
竹有  
岳輜

安井川よそ

名月れ砂ふあつた旅のれ

梅間

見ゆる人の花のあらしき山休えん  
ゆへ納涼琵琶も葉白も合はるこ本  
ふあやしの志まじきるさの中  
あや我の腸の折きとらる後  
山里やせめれらちわも入ぬの花  
鹿の音れまゐるう庭木の森を家  
庭のうらとゆれ教る小はきうれ

鹿野  
李臺  
秋峰  
逸人  
五雄  
東陽  
千阿

しらぬあまのこころの嬉し初志たれ  
おのこれ喜まはるしあはれ  
青のの葉のふらふら揺る  
仰山さかやう戸くまらめ枝

草人  
智翠  
木芽  
阜池



あさるの何ちら向ふも笑うわ  
透坂の小庭もちりり那芒  
家鴨等のまな尻むきて杖の  
合点してまげこやふと布穀  
桶の茶ふ山。こゝまでわき守  
くふるまうたふし廿日月  
まのれやるうと低き細の家

申齋  
子影  
烏頂  
亞溪  
志宇女  
春雄  
斑車

三枝のやぶさきこころ枯らしめたる  
枝のつらみなくまよふ人の世をば

和山  
空何

江よ入て海らひちちぬほと暮  
人志もぬちをまつこの世をら月  
ちのさきれやうし春のあそびをけ

蒼乳  
瓦全  
丈九

雪とえほふるあそび撰りてこし

奇測

磔れ蚊のときわ直して初時  
二心助をいらぬと菴の空れを  
ほろえん咲孫とあそぶのいづこ  
梅ののさけて岸れゆよ日乳  
袷とも定めこのころ竹の中  
山守の宿のさくらを志木が  
蛸焚ん梅四五里んの危の冬  
夕立ふおきて押さぬ旅するも

井眉  
星譜  
長齋  
竹齋  
三津人  
米彦  
祝外  
月居

嘯の月は上も下もささくささく

魯隱

こまごのちるゝ雨降つゝの田より

碧子

飯釜をみうく空をわき雪を

万和

まじしゝやちりの上れ山折る

荷涼

はひと日あも砕らん 槐の花

八千坊

端妻や原より一糸馬の上

友国

もつ花中二のうゝそささく

升六

雪空や海士の夕群をのらるゝ

一草

住人もいふこ休せんれちの同

相栖

梅を出て野の中は雪の一木も

喜齋

耳より探るひらり 松乃中

来紀

影を掃きける 札も来しをみる

玉屑

材木の賣 買海をみるうれ

不海

ひとわ 榭 釣 小 ち り や き け ち り なる 不

樽堂

お ち り なる ち り なる ち り なる ち り なる 不

鷺老

ま 生 入 ち り なる ち り なる ち り なる 不

玄蛙

夕 ち り なる ち り なる ち り なる 不

閑齋

久 山 や 鈴 の ま ち り なる ち り なる 不

武陵

ち り なる ち り なる ち り なる 不

菊也

星 の 夜 を ち り なる ち り なる 不

鞍風

は ち り なる ち り なる ち り なる 不

天外

蓋 と なる ち り なる ち り なる 不

丘高

ち り なる ち り なる ち り なる 不

椿堂

菴 の 戸 を ち り なる ち り なる 不

鶴鳴

大 ち り なる ち り なる ち り なる 不

推已

ち り なる ち り なる ち り なる 不

ひつし

五 力 馬 け ち り なる ち り なる 不

滄波

雪のころきや 竹乃ころき際  
あんできり戸を 押さへむ秋の輝  
涼しきふ年とあめこむはきり

為徳  
巴文  
路白

抱子中 袖より足らぬ 意のそゆ  
地帯の形こころをうると更しや  
存野れらのつきふえてあはれ  
るる野もや花をまをさすや

意迪  
雨塘  
兄直  
恒丸

舟よりきり 泊りすまを 新酒が  
まめてあまこころをまきまき山家  
紙燭しそ葉ころも虫も見たりや  
うはほわも板り見えてあまを  
青柳よめまきし 糸入り提  
神楽の留ちうきう 伊弉山  
ちる木の紫着を 撥ふえまきや  
きりや葛れ花咲 人乃家

至長  
竹加  
去雲  
文水  
田美  
蒼峨  
青岱  
蘆月

あまのあらしのたけしと津原  
大なるも小なるも交る花見の乳  
依初の猿でもるれ芒の那  
雪の戸や凍て吹く心まの屋  
埋火のくももをな菜汁の  
更衣二日を法子の日さうたの  
掛りのく連磨の歌よ五月の  
皆戸のの踊を守て、舞る代り

惟牟  
取人  
可長  
鶴老  
月船  
近嶺  
素綾  
八重女

灌仏ふ答れさうらまを咲かすわ  
多竹あまのうやを孫をまもれと  
雪しやいづらも秋れをま  
まこれ舞もちうらと見るさえ小松  
酒のこふ見あつとさうま雪の峰  
猿まも竹の社をわしるま  
糸や啼あかめけりの糸  
まほふもこれうらや纏るま

一白  
弁入  
南道  
その  
金堤  
鞍丸  
桂之  
太筋

少年

三九

葉さくらやたれ木もれを隅小

輪之

同し夜をさる糸し 周や杉松

媒柯

うの糸やわさく 園れ傍ふ松

野翠

鹿中や皆甲合せふさらん急て

里丸

せくしとあそ歌咲し 家のとほ

白老

杉をさる翁て 暮ら守月とさる形

杉長

秋のあつめさるさる 夜ゆらふ

郁賀

息災ふみやをぬむや 漢楸

宗拱

海音と我の申さるさる 也草

也草

そらら申夜の明て 居てあそ咲

其文

あそくふちて 戸はく戸口は

盧一

あめさるはく 音子ふ萩の輝

草史

まん伐ふ櫛をせう 木のほろむす

鳥周

足りとのあつるま 山中暮夏の急

晋記

あつるさるや 相れ一葉はく

平山





こゝろ寂らぬ親まきこゝろもや草の種子  
 菜の花や此菜まにちわうらる  
 松竹や梅うけよて松の月  
 素英  
 隨和  
 ト甲

まぬやうこらまきゆる鐘の聲  
 燈のこほひや二月の山とりよらわ  
 志留柳のこぼれこぼれしとよまの夜  
 そよこらあさ小松裏はれうれは  
 うきこらふたささもあつり地す  
 鳴や蛙あつたまきこほれぬの松  
 小葉あつす神いとしませもつ嶽  
 藏六  
 湖中  
 松江  
 義香  
 仙雅  
 利根古  
 阿童

山の月あはらむとてしるしと歌をきく

乙二

あはれなれば来てきこころの細路は

冥々

かつらぎの神の機りんやとれのも

秋ま

をこころの夕日とてしるしと九月や

連々

逢ふし雨うれ雪のゆればあまうら

與人

牡丹もさうとてしるしと二の力

麦市

積るるやあまきまてゆるみとの音

雨考

鳥の音もあはれしとてしるしとあまきま

日入

銀河の秋はとまぢれあめとて

雄渚

とらゆきれつとてよももや夷傳

文郷

あらしとてえゆるしとれのとて

きよ女

益うけして神林らしやもの歌

巢居

名もあはれやとてしるしと二刻まし

且々

あらし夜のしのよみあはれんみやと

多代

まきとてしるしとてしるしとて

三及

まはれ潮とてまきとてまきとて

沽橋

鳴蛙さうりぬ城もあらの年

本角

松崎みそ

此崎も志と置てしとれろの

楚山

そりれもの口癖よゆきの傳

子龍

この歌のよみかたし

盛をこころの出す

とよあらしうのあはれ月し

素卿

この月もまやふ奥れ音うれ

野松

冬もや秋の衰れをもてあす

河道

俣川玉砂

大もつと梅之痕

玉堂も母亦

花鶴林寺

いふ事なきは

く角し かく

穉 乃 乃 乃

比ハ 乃 乃 乃

氏田信玄

今 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

詩 乃 乃 乃



心州

書名

書名

松ノ坂を遊んで痛しりけり

草鳥

花をよもいれ雪のふり

香松

ゆらゆる蛇のふり

連雲

ふ梅よ武藝の宿も月よ

遊耳

かき河川やも仙入ても月入ても

専阿

ふ寝るれ外もよて寝くやの月夜

未帰

まよめや隔くよす小借紙

貫珠

木まきらの角を宿と小夜子

圭兒

結直才の帯とほるれ名跡いれ

東

清をれ少らうとよの茶

桂塙

孤の態もふりて茶葉うた

真澄

終りけや畔ふめりは松のつら

三甫

夕風やまよ目よほく晒川

喜水

青くさねのや松岸の梅よの

省雅

楷の宿有ふりゆらひるれ

可交

新雪や掛くもよ山よ

五芳

紫山子等と名のいひ歌や須戸の里

梅柯

よん枝を雀ふりらへ暮のん免

幸雄

川芦の舞もまらん遠ひ障

雪甫

吹まふとてそ片身よゆふを

卜阿

仕てあゝ瘡瘡の歌やうめれ益

牛止

山寺へふらん貸りり松の月

草鳥

何とてあはれあはれ  
 今月やあはれ  
 虫鳴乃と雨も水と  
 月よみ

秋涼し夜益とまぐくをなれ候

真治子

唐の舞夜を 埃祖もさうりくわ

思議

子小草夕志あつして 灯とる虫

弓を

花芒吹降と吹て 月ふある

雪雪

雲向多中 高ある 時のわ

孫彦

山里や 屋花 咲ても 家はくも

少年 金系

穂妻 穂朝も 嬉ふの 且れ

昨非

いづつ 月れこ 宿を ぬきこ ぬめ

龜齡

文力と十日と 志一 枝授う 野

草丸

尼寺小 瞿粟を ちわくも 甚れ 糸

重行

その 阿和 妙ねら ともれ ぬ 阿ら

柳後

いづつ 山ゆ 山ゆ 山ゆ のも ちの 月

石郷

うの花の 宿を ちまふ 思ふ や

南丘

氏のを ちまふ 思ふ 思ふ 又 ぬる 花

太年

昔の人 月あつめ 思ふ 思ふ 神と くら

鬼孫

早の 承 降の ちまふ 思ふ 思ふ 花

夜涼



道の夜やをれ飢人何れ  
 程也  
 志くもや廿日亥中の内おろ  
 柳覇  
 草花の毛層ふらるれ空を吹  
 習之  
 うんこる文小鳥も思ひしに  
 蕪田  
 空を飛や 鉄流のくた月の家  
 仙朝  
 柳花をより返らもて林の  
 壽好  
 夕風や 雲ふさうとふあら雀  
 見鹿

陽の音あるあしあれ  
 陶氷  
 新酒ふさぬる細代をさるやの  
 艸美  
 牛のろし何ある言を勝月  
 子雄  
 ひと早うらえを柳花結りぬ  
 縣子  
 ふけはほほるる人ふ出るひの  
 素仙  
 柳花の夜を何れらるる花の  
 其雲  
 その家り林麓かおや蟻の穴  
 飛銭  
 あらゆるや 雲をけるる雲  
 一哉

瞿粟の葉小葉のらぬう面をき  
 神のれ松を花をゆし花の力  
 人並小木履をくまの冬の力  
 鈴の如の花屋のうの暮る所  
 夕のうや柳のうえて物こそ  
 鳥の力赤心樹の生るあまて  
 谷れ清ある玉の流る音やま  
 城のうとて人焼きひる酒

有斐  
 蛙文  
 蟹守  
 可都里  
 池有  
 苔翁  
 敲氷  
 敬父

さんたよとてね珠のたまきん明る也

鳥雲



鳥雲

行も花ぬ橋やをしのも花の雨  
我の歌を月小画てあうしんり  
勢は尾ふさういもやさうき西  
まはれぬきまうしりり小出雲  
入月や手植の松を何と吹  
持船の塗のぬらす杖のそ  
唐人よ不二をまうる葉の茶  
何ぞもははるこも人の家

一作  
可得  
如仙  
挂瓢  
平歡  
吐雲  
固有  
安男

置まはるや新しうはるはく松の春  
籠子峰や山を出て来る階子賣  
まら梅の葉よ勝てあう何ぬ  
ちるや芒虫れいのらりまうて  
持子のもはるや新しう角太河  
まらまらしんを芒れ踏く系  
持杭のひきこてみるや枯壁系  
ちる花やまの来るまら人の物

秀哉  
花青  
亀泉  
花嶽  
千波  
孔雅  
和泉  
鬼童

清しとや目垢のつらぬふ二の山  
新のほふふさうくもるも強をえてまぬ  
りよとらふもぬもさへたつて雪の降  
揺らぎをわらふ瘦たりのみとす  
うの気き強まの灰のうらなれは  
むらうらまきとらうの積れも聖仏せ  
飯喰くとも新の味や田子取  
梅うらや遠うらやゆきはたうり

勇駒

遊雅

花唇

鬼嶽

拵枝

久丸

杉丸

田丸

古家のあつもの先よりとまれば有  
山里や春はくもふらぬさくら  
そよふ垣根をのほる 鮠うり  
神林やあふたんやうらふ藪の家  
る雪のふもきてあま山子れ洞丸  
晴る来て枕うらうのほろの山  
杉魚を波と競んと舞を吹  
る雪月の月も花も華川

夏木

拍枝

古川

花蝶

和拵

畔丸

似角

畑丸

華川

見鷄	持しや鮭のちめるるさこれいろ
拍舟	茶やわれ茶さうらふ涼あぢり
物成	物の子あまて候りて盃の月
水圓	一足ふひのりしこれうんこさ
巴園	あまこれさる昔よほをあまきり
淇青	なるさやんしのあまはほの跡
樵村	一しほあまのあまのあまの餅の口
艸美	あまのあまのあまのあまの相のを乳

よぶ茶のけり  
出たりあま

け白る身のたうる

ちせこや注すふらつるますお織

漫く

大根をあらうよゆるや啼ふる

方居

菜畠を厚ふもさるおきん

可堂

海しらのうらをこゆのこめか

宝山

ほろろろ見ても物もやさうら

恭應

石蕨のせしよふれよりしるさ

空明

むらぶの陰うこまひてらる梅

應明

ふきや佛もあつふ好る

布知真

あよふれ吾身てまげんさのあ

曾人

もつふよはふのまをねんくたわ

貫素

あつるや物くらさの又出ら

松栗

續せましくもえよ入ぬ二日月

まの女

あつるのあつる言てあつる

玉枝

なつるくしつれは種の色な

一作

赤松のこもりしつれは種の色な

真つ

桶ふ入て懸れさつるにむじら

苔童

おまの草ふ池のひつ身寒きさう乳  
雅子やをわううまき乳を吹  
音の百の月れやあつや妹あつ  
あまの歌のたよまらうやうや  
らうの菊はねたううううう  
湯林の松を定むる押合ふて  
能くあつる風置てよの秋の咲  
ひらり厚のなを雲は行くうう持

漢筵

悠哉

鶴聲

宜樂

土牛

真洞

左岳

松甫

よまのあつや月の下屋あつを吹  
蘇きあつらやあつてあつて吹きたる  
子のあつあつれとくを消てり  
陰のあつや山雀あつらう月を吐  
指ううあつてや垣ふ野の群  
黒く染の小村出てゆくあつあつ  
あつてあつあつあつあつあつあつ  
うらあつあつあつあつあつあつ

椿嶺

喜樂

長平

祐之

百樹

李道

素朴

左龍

ふらふらしてらるるや葉の揺ら

平樂

堀や杉ふ生るる人々あり

洪青

口舌してやる乳ふらるるやふあけ

樞志

時を淀もみぬふらまき川

二雲

らぬのおらぬれらるるのまき

巴圖

梅のれ障子ふらるるあらる

花交

菴の戸や志ふらるるあらる

鳥語

岩のふらふられ仲の丹揺る

濤花

月とて又我らのふらるる

琴雪

咲くらのふらるるの揺ら

左城

まはれあふ山子の裾ふらるる

嵐外





もろしと秋の笑うらや

奇梅

秋のふき尾花ふきのうらや

如松

鹿の舞更ふ遊ふ氣をぬきや

亀守

梅の月何ぞよきよき庭のや

真貫

庭の月笑ふよきよき庭のや

鶏尾

庭の月や秋をまをえて落るる

柴車

庭の月や秋をまをえて落るる

砂溪

庭の月や秋をまをえて落るる

連水

翠羽平や入日を福らふ草の先

山泉

口の香や膳のうらや

庭泉

かきやを思てあやや相ひそ

香城

あやの吹きや

和童

あやの吹きや

壽来

拾遺てはのこし

松仙

いことと秋のうらや

庭樹

か入建てし

素麟

五七五

母伴を捨ひ廣くして去るれぬ

奥遊

山を出て見ても枕ふさぬさか

三調

舟のききよふしのきを言ふ花おが

青扁

岸れ石一丈見えそあまの言

百壽

人魂の見て飛りや雪れ不二

西成

しるもや不破の園屋の行便足

素原

山吹も志られぬまをさうまの言

棠藪

志る愚と瘰りや八日のまきれ花

尋古

雪を割て出さやとしれ時を

松夷

多仙や池も皺のよれ時を

敲押

神植田や植ふあつる風の言

平坡

子の影も見らまこころまれ物の無

扁頭

手細工の強言貸うあま

遊馬

湖を袖ふ入るやさうれ月

奇石

青柳や小石のうれ妹の言

砥長

ちりきす杉ののり夜をさか

無端

細末

ふきれ池ふこちるくうれおまをれ

一雞

雪積やつ田くちうた夜の新

何鳥

うらうらやう々集る葦や盆れ月

露染

笠肩を枯柳踏ゆく夕うれ

朝雪

ふん飯うよて見るこんぬめ茶

非一

よん輝をころうーおん初田りし

少手

百見

秋もともや海うちて見るる芒の種

松保

いと囃子ともをもすめも新葦

と子

はく花ふ葦を移つてれさるるが

くめ

川筋や舟口をるんてともまの風

如柳

生まやちるれくくくよ抱ね足

如童

有ぬをさるるあとのそらあらんが

登高

あこさたしと見るやうすこ四十雀

成高

まのしれ花よをれしむの骨

梅舎

入りひの陸れうく花いさこ

林千

酒のこ小鶴を来るちあきり危

素柳

海の春をふきかきして冬は月

白持

うらふ心すれ舞ふりひせ船やうらふ

一磨

春のや蛙の春のうらふもくもくも

栂里

晩鐘のうらふふ花の月よりうら

如勇

月の藤の跡の志のうらふよ菊は茶

梅枝

りりりるるるる澤山はうらふく

梅下

神居のれ戸はふ陰ふかおうら

松荷

春の夜のうらふあつさふ物うら

旭山

ほろくさけのうらふあつさ十五

石敲

枳殻の枝をうらふあつさ終のう

為風

玉桂の入陰のうらふあつさ

圃桂

うらふあつさうらふあつさ

九栗

数うけや灯うらうらうと可る情

松保

追加

歌らうしし雪の松杉枯さくん

起得

子結ふき毎覚へしし也星戸つわ

紫明

やすしと紅紫をぬぬ海の内

南山

鴨の鳴日ふ廊わたり冬れ雨

魯駟

正月や一寸出てきき人の中

風志

六月や上戸の掛し橋乃月

依ひら

柔れ夜の行燈杖てききりき

鷺月

流上齋四時

ききりし花を休えんふ来にたり

百二

亡父とあつしうりし妙美

は集のちうりきを

よ終るしてわの

子黄を訪ふ

奥とたのきな流らぬる星のこり

ふらふふ星ふりきれて渡る序

きりししきりしきりし丘の家

うの枝を潜まは紫をよむの月

百二

蚊帳着 裾をめぐれ酒れ糸

一 峩

振鞍もわふはるる智恵ありて

一作

帝もも翔日らし 龍はれもまを

真法寺

輕ぬたの尾ひききと染る美るれハ

巴園

きつゝ引きれまてれ敷入

洪青

もつ花のはつこしつとふれ出て

草鳥

法の具れ乾く起しつろそ

一 峩

ふ際ふも狭くゆくも晴やらふ

松保

寺とて直すはれ吹ける

百二

丸ひまを四十冊この書習ひ

志法寺

雪を帯りしふまららまらつてれ冬

一作

源もふなる 松とて好ねる有さう家

洪青

用なきは 浪の目つるふ一めち

松保

大名ふねをり 跡れ高ころんを

真つ子

うらまはるん天の野乃響合

草鳥

児を控ぬ子れ翼をる杖の月

一作

多路を控よて響く空也寺

巴圖

小首駉馬つこの子を肩よやらん

百二

平家うらまはるんあそとてなまし

洪青

らん臺ふはらうりと雲ふ市の風

一莪

うらまはるんあそとてなまし

松保

よん娘をやつと見せし控子れ

草鳥

枕うらまはるんあそとてなまし

まつ子

あつた花を志せりふ小豆流りつ

百二

控をる ねとれまらぬ夕空

一作

みろまらぬもの影しる龍をして

一莪

志賀の畠乃いさうし以月

草鳥

うらまはるんあそとてなまし

まつ子

梨子小唄付猿鬼れさる

巴圖

花より花を何の志し此竿の先

淇青

清釜待れ片れを待し

一歳

ひこしと波の節し

巴園

常のうらむるもつそれ

百二

玄くも実小花の雪のそまを

一作

まゝ右して汲む

松保

百二五 一作五 巴園 草鳥 四

一歳五 志子五 淇青 四 松保 四

吾友百童法所共くまよ

もや三よもや成ぬ鶺鴒川乃

水はおらん 平し流るる

向くや月み空時

山は心なき昔な

志はく 唯しあはれ以存子百二

父の眞福をいのか 既僧侶手

招く借養しぬおらぬ



何  
さあ  
みの  
作善  
吹  
平  
吹

父  
心  
中  
障

六のあ九子くーの石よ一字は  
こゝろも書おのり  
かゝるる程集の以事ハ凡何  
平一垂あ〜あ〜と 深〜とを 求  
めり〜とらよ反古抄と題し  
て清き〜と母と流〜とあら

今日着一巻也

四に大(四)  
八九〇八  
九三三〇  
二六八  
二四二  
又三三六  
六七二  
六三九  
七二八  
大係八通

宮崎東岩園渡過

七二八  
九三三〇  
二六八  
二四二  
又三三六  
六七二  
六三九  
七二八  
大係八通

